

# 副詞的用法を持つ漢語の意味変化について

## ——「点々」を例に——

蔡 嘉昱

キーワード：漢語副詞、日中対照、時間的限定

### 要 旨

本論文は、「点々」を調査対象に、中国語と日本語資料における用例を整理・比較することにより、意味・用法などの変化を考察する。調査した結果、「点々」は、日中両言語で異なる方向で変化していることが分かる。

中国語において、状態を表す形容詞用法が盛んになるにつれて副詞的用法が衰退している。一方、日本語において、「点々」は副詞として定着していく傾向が見られる。

### 1. はじめに

「点々」は日中両言語で異なる用法で使用されている。

- (1) a. 我能看到遠处的点点灯光（作例）（下線部：点々の星の光）  
b. いまでもヤクスギの森の中には、スギの巨大な切り株が点々と残っている。  
（『森林への招待』，西口親雄）

(1b)は現代日本語における用例であり、「点々」が「ト」を伴って「残る」という動詞を修飾し副詞的用法を持っている。一方、(1a)は中国語における用例の1つであり、「点々」が副詞的用法を持たず、形容詞として使用されている。さらに、古典中国語において、すでに形容詞として使用されている用例が観察されている。

- (2) a. 点点暮雨飘, 悄悄新月偃。(『南溪始泛』, 唐, 韓愈)(下線部: 点々の雨)  
 b. 锦文苔点点, 钱様菊斑斑。(『廬岳閑居十韵』, 唐, 雍陶)(下線部: 点々の蒼苔)

(2a)の「点々」は降っている雨の状態を表す語であり、(2b)の「点々」は動きがない「文苔(蒼苔)」の属性を表す語である。つまり、「点々」は、中国語において、状態を表す用法と属性を表す用法の2つの用法がある。一方、日本語近代資料において、中国語と異なり、副詞的用法として使用される用例が見られる。

- (3) 此に於て竹葉上に點々滴れる所の露を嘗め、以て漸く渴を慰す。(「利根水源探検紀行」, 渡邊千治郎, 『太陽』, 1895)

つまり、「点々」について、日中両言語で異なる発展傾向が見られる。本論文は、時間的限定性の視点から、日中両言語における用例を整理・比較することにより、漢語形容詞<sup>1</sup>が日本語に副詞的用法を持つようになる過程を考察することを目的とする。

## 2. 先行研究

従来の先行研究では、動詞と名詞が連続することが通言語で見られる事実だと指摘している。Givon(2001:54)では、次のような図が示されている。

most stable .....				least stable	
tree,	green	sad,	know	work	shoot
noun	adj	adj	verb	verb	verb

図1 The scale of temporal stability (Givon 2001:54)

<sup>1</sup>「点々」の品詞について、『日本国語大辞典 第二版』では、形容動詞としての用法が存在していると述べている。しかし、「点々」は本来中国語であり、古典中国語から伝来してきた時点で形容詞として働いている。一方、「点々」は日本語においても、形容詞的用法(連体修飾用法(例(19))と叙述用法(例(20)))と副詞的用法(例(1b)(3))を持っている。日中両言語における使用状況を比較するために、本論文では、「点々」を「漢語形容詞」と呼ぶ。

## 2.1 中国語において

ここでは、張の一連の研究（張 1995, 2006）を中心に、説明していきたい。朱(1956, 1982)は形式の違いにより、中国語の形容詞が性質形容詞<sup>2</sup>（简单形式形容词）と状態形容詞（複雑形式形容词）<sup>3</sup>に分けられると述べている。朱(1956, 1982)の分類では、「点々」は典型的な状態形容詞である。

それに対して、張の一連の研究（張 1995, 2006）は、形容詞を「動態形容詞」と「静態形容詞」に大別し、静態形容詞をさらに「性質形容詞」と「状态形容詞」<sup>4</sup>に分けることができると指摘し、中国語の形容詞の意味・用法を考察している。

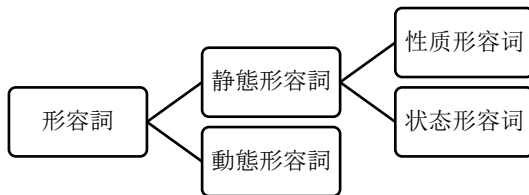


図2 張(1995, 2006)の形容詞分類

張(1995)によると、動態形容詞は、単音節のものが多く、「已经・了」及び「没」と共起できる。

- (5) a. NP+已经+\_\_\_\_\_+了      水准已经高了。      水準が高まった。  
 b. NP+没+\_\_\_\_\_      水准没高。      水準が高まらない。

つまり、張(1995)で指摘された動態形容詞は、形容詞が臨時的に動詞として働く用法を指し、本論文で考察したい「点々」の意味・用法と関係していない。

静態形容詞に属する性質形容詞と状态形容詞について、張(2006)は、性質形容詞は程度副詞（最・狠・比较・稍）で修飾されやすく、「状态形容詞」は程度修飾で修飾

<sup>2</sup> 単音節形容詞（大、好など）と一般の2音節形式（大方、偉大など）を含む。

<sup>3</sup> 朱(1956, 1982)に定義された状態形容詞には、AA型量語、AABB・ABAB型量語、ABB型・A裡BC型・A不BC型、f+形容詞+的型などの5種類がある。

<sup>4</sup> 張(1995)で定義された「状态形容詞」と荒(1989)・樋口(1996)・八亀(2008)の一連の研究で論じている状態形容詞を区別するために、以下、張(1995)で定義された状態形容詞を「状态形容詞」という（張(1995)で定義された性質形容詞を「性質形容詞」という）。荒(1989)・樋口(1996)・八亀(2008)の一連の研究で論じている状態形容詞を「状態形容詞」という。

されにくいと説明している。この分類では、「点々」が中国語において、典型的な状態形容詞であると考えられる。

さらに時間性の意味特徴により、性質形容詞と状態形容詞も区別できる。性質形容詞は時間と関係なく、「始終」のような持続を表す語と共起しにくい（時間-）一方、「已经」のような過去を表す語とも共起しにくい（静態+）のである。それに対して、状態形容詞は、事柄やものが一定の時間内の状態を表すため、「始終」のような持続を表す語と共起できる（時間+）が、「已经」のような過去を表す語とは共起しにくい（静態+）のである。

表1 性質形容詞と状態形容詞の意味特徴

	静態	時間
性質形容詞	+	-
状態形容詞	+	+

しかし、このテストには問題が見られる。例えば、「点々」が一般的に、状態形容詞とされているが、「始終」と「已经」両方に「点々」は共起できない。「点々」のような例は他にもいくつか見られる。

- (6) a. 白花点点。 白い花は点々である。  
 b. \*白花始终点点。 \*白い花はいつまでも点々である。  
 c. \*白花已经点点。 \*白い花は点々であつた。

理由は、性質と状態の境界が分割しているものではなく、連続的な性格を持っていることである。中国語における「点々」は状態形容詞のうち、性質形容詞に近いものと考えられる。このため、本論文では、性質・状態の視点ではなく、時間的限定性のスケールの視点から「点々」を分析していきたい。

## 2.2 日本語において

日本語において「時間的限定性」について考察している先行研究が多く見られる。時間の限定性とは、「具体的に、一時的、偶発的な＜現象＞か、ポテンシャルで恒常的な＜本質＞かの違いを捉えるもの」（八亀 2008:28）である。工藤(2002)は、日本語

における「時間的限定性」を図3のようにまとめている<sup>5</sup>。

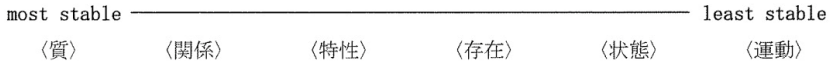


図3 日本語における時間的限定性スケール

〈質〉・〈関係〉・〈特性〉は恒常的な本質であり、〈存在〉・〈状態〉・〈運動〉は一時的、偶発的な現象である。このため、〈質〉・〈関係〉・〈特性〉は時間的限定性がなく、〈存在〉・〈状態〉・〈運動〉は時間的限定性がある。工藤(2002)は、動詞は〈関係〉・〈特性〉・〈存在〉・〈状態〉・〈運動〉を表し、形容詞は〈関係〉・〈特性〉・〈存在〉・〈状態〉を表すと説明している。

荒(1989)、樋口(1996)は、「時間的限定性」の有無に注目し、形容詞を時間的限定性のある「状態形容詞」と時間的限定性のない「質形容詞」<sup>6</sup>の2種類に分けている。

### 2.3 日本語の「状態形容詞」と中国語の「状态形容词」

本論文では、時間的限定性の視点から、日中両言語における「点々」の使用状況を考察することを目的とする。

なお 2.1 節と 2.2 節に述べた通り、日本語においても、中国語においても、時間的限定性から形容詞の意味・用法を分析し、分類することができる。さらに「性質形容詞」(張 1995)と「特性形容詞」は似ている概念をもち、恒常的な属性を表す形容詞である。「状態形容詞」(張 1995)と状態形容詞は同じく時間的限定性があり、一時的な現象を表すものである。

しかし、日中両言語の「特性形容詞・状態形容詞」と「性質形容詞・状态形容詞」は、いくつかの相違点が存在している。

たとえば、張の一連の研究では、状态形容詞について、①述語の用法、②定語（連体修飾語）の用法、③状語（副詞的用法）の用法、の3つの用法を持つと述べている。つまり、「状态形容詞」は述語の位置以外に、連体修飾語の位置にも現れると考えられる。

日本語において、荒(1989)は、状態形容詞が「述語の位置にしか現れることのでき

<sup>5</sup> 工藤(2002)の図の左右を逆転したものである。

<sup>6</sup> 樋口(2001)は「質形容詞」を「特性形容詞」と改称した。

ない形容詞」で、質形容詞が「述語としても、連体修飾語としても使われる形容詞」であると述べている。述語として使用される場合、時間の限定を受けている「状態」と時間の限定を受けていない「特性」両方がある。質形容詞との関係について、荒(1989)は状態形容詞が連体修飾語になると、質形容詞に移行すると述べている。このように、「状態形容詞」と「状態形容詞」が同じく時間的限定を受けているが、文法的性格が異なっていることがわかる。

### 3. 調査方法

本論文では、『日本語歴史コーパス』、『日本古典文学大系本文データベース』、『日本古典文学断本大系本文データベース』、『CD-ROM 版新潮文庫 明治の文豪』、『CD-ROM 版新潮文庫 大正の文豪』、『漢籍電子文献資料庫』と『国家語委古代語語料庫』(語料庫在線)の資料を用いて、出現時代、出現頻度、意味と用法を調査した。

具体的には、『漢籍全文資料庫』、『国家語委古代語語料庫』において、「点点」をキーとして検索した。『日本語歴史コーパス』の検索においては、語彙素「点々」をキーとして調査した。『日本古典文学大系本文データベース』・『断本大系本文データベース』、『CD-ROM 版新潮文庫 明治の文豪、大正の文豪』においては、「点々」、「点点」、「てんでん」、「点てん」をキーとして検索した。<sup>7</sup>『CD-ROM 版新潮文庫 明治の文豪』と『CD-ROM 版新潮文庫 大正の文豪』の調査には、『ひまわり』を利用した。

### 4. 中国語文献における「点々」

「点々」は本来漢語であり、中国語文献において用例が認められるものである。

まず、「点」について、中国最古の字書である『説文解字』では、「點，小黑也。」(点は、小さく黒いものである／筆者訳)という説明がある(初出例は「如彼白珪，質无塵点」(『晋書』))。量語の形を持つ「点々」について、中国文献の資料から見ると、中国の南北朝時代の詩『晚秋』(約6世紀，庾信)に「点々」の使用例が見られる。

(7) 可怜数行雁，点点遠空排(『晚秋』，南北朝，庾信)

---

<sup>7</sup> 用例を全て抽出したか否かを確認するために、「点」、「てん」を検索し、「点々」として使用される用例があるか否かを調査した。

(7)は頼りなさげに遠い空に飛んでいく雁が、小さく多いことを表現している。(7)における「点々」は、「点」という字を反復して作られた表現であり、小さい点（雁）が多く存在していることを表現しているものだと考えられる。雁がいつも「点々」の状態を持つのではなく、雁が飛んでいく様子が「点々」であるため、この段階の「点々」は、副詞的用法をもっているのではないかと考えられる。ほぼ同じ時代では、(8)のような用例が見られる。

(8) 文苔点点，錢様菊斑斑。『廬岳閑居十韻』，唐，雍陶）

(7)(8)から見ると、「点々」が、①小さい、②多いという 2 つの特徴があるものを修飾することがわかる。(8)は、詩の一文であるが、形容詞述語文として解釈でき（「文苔が点点である」）、「点々」が明確に形容詞として使用される用例である（苔が小さく多いことを表現している）。苔は小さくて、地表や岩の上に成長し、広がる植物である。「点々」の意味にある「小さい」・「多い」は苔の特徴である。この意味で、(8)における「点々」が時間と関係なく、「文苔」の特徴を表現するものである。つまり、(8)の時間的限定性は薄いと考えられる。

(9)における「点々」は、雪が飛び舞う様子を表している。「点々」は雪の特性・属性ではなく、雪が飛び舞っているうちに、ある時点の具体的な状態を捉える表現である。この意味で、(9)における「点々」は、(8)と異なり、時間的限定を受け、状態を表すと言える。「飞英点点」は時間を表す成分「春」と共起できるが、「文苔点点」は時間を表す成分と共起できない。このように、中国語における「点々」には、(8)のような恒常性を持つ「点々」と(9)のような一時性を持つ「点々」が両方存在している。

(9) 飞英点点，春事已阑珊，风雨横，别离多，断送英雄老。

（『蓦山溪』，宋，王以宁）

下線部：飛び舞う雪が小さくて多く、あちこちに散在している

「小さく多い」という意味は「点」の字義から派生した意味であるが、「点々」には別の意味も持っている。明・清と確立されてきた現代中国語に近い「白話小説」には、「少ない」の意味で使用される「点々」が見られるようになった。

- (10) 藕郡主点点年紀，說這般話，真是蕊珠仙品。（『紫簫記』，明，李十郎）
- (11) 趙元听了，冷笑一陣，想道這点点交差看管算什么呢？還有很失体面的在后面呢。（『最近官場秘密史』，清，天公）
- (12) 今年雨水多，結瓜果都不好。上会子来孝敬了這点点，硬的軟的了骗一大車子東西回去。（『紅樓夢補』，清，佚名）

本節では、「点々」の古代中国語における使用について調査した。表 2 に、「名詞＋点々」（「文苔点点」のような例）、「点々＋名詞」（「点点蒼苔」のような例）、「点々＋動詞」（「点点随波，望极江亭」のような例）の用例数をカウントした。また、(8)(9)のような例があるため、「名詞＋点々」、「点々＋名詞」それぞれには、「特性」、「状態」をカウントした。

表 2 中国語における「点々」<sup>8</sup>

分類			隋唐五代		宋		元明		清		民国初	
複数の点			1	3%	5	4%	3	7%	1	7%	0	0%
ものが小さく多い	名詞＋点々	特性	4	12%	18	14%	4	9%	2	14%	2	50%
		状態	4	12%	14	11%	5	11%	2	14%	1	25%
	名詞＋点々	特性	6	18%	39	30%	4	9%	0	0%	0	0%
		状態	4	12%	30	23%	13	29%	1	7%	1	25%
	点々＋動詞		15	44%	23	18%	4	9%	2	14%	0	0%
	少ない		0	0%	0	0%	12	27%	6	43%	0	0%

表 2 に示すように、清の時代の割合が元明より少し増えるが、全体的に副詞的用法と思われる「点々＋動詞」が減少している傾向が見られる。このように、時間につれて、中国語に副詞的用法をもつ「点々」が少なくなり、形容詞的用法が中心となっている。したがって、現代中国語でも、副詞的に使用される「点々」がほぼない（『国家語委現代語語料庫』（語料庫在線）の検索には、44 例の「点々」のうち、一例もない）。

また、「名詞＋点々」と「点々＋名詞」の形と関係なく、状態を表すものと特性を表すものが両方存在している。用例数が少ない民国初を除外すれば、隋唐五代と宋の時代では、「状態」より、「特性」に属する用例が多い一方、元明と清の時代では、状

<sup>8</sup> 表 2 に示す割合は時代別の意味用法の割合である。



態を表す使用例が特性を表す用例より多い。つまり、時代が下るにつれて、一時性を持つ「点々」が形容詞の位置に出現することは増えている。副詞的用法の減少はこの影響を受けているのではないかと考えられる。

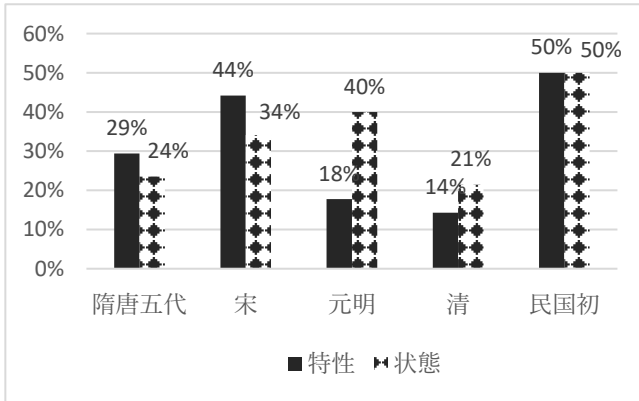


図4 用例の特性と状態の割合

「少ない」の意味で使用される「点々」は唐と宋の時代に見られず、明の時代から小説で見られる。明の時代によく見られる「白話小説」の特徴は、口語を使用して描写される点である。このため、「少ない」の意味で用いられる「点々」がその前に話し言葉で使用されていたと考えられる。「少ない」の意味を持つ「点々」は、突然明の時代の小説に出現するのではなく、話し言葉において発展していたと考えられる。また、各時代では、(13)のような、「点」を重ねて作られた「複数の点」の「点々」がある。(13)はどのような色の花でも春色であると言っている。「点々」は、赤い花のことを指している。数量の増加、あるいは、複数を表すために、疊語形が用いられる。「点」の字義（小さい黒い点）との関係からみると、「複数の点」という意味が字義との関連が最も強いと言える。このため、中国資料だけではなく、日本資料においても、「複数の点」の意味で使用される用例が見られる（詳細は後述する）。

(13) 分紅浅与紅深，点点是春色。

以上から、「点々」は中国語で「ものが小さくて多い」、「複数の点」と「少ない」の3つの意味で使用されると言える。「ものが小さくて多い」の意味で使用される

「点々」は中国語に唐詩や宋詞のような韻文に多く見られる。形容詞的用法と副詞的用法が両方あるが、副詞的用法をもつ「点々」は、中国語に出現したが、衰退した。一方、形容詞的用法をもつ「点々」が中心になっている。また、「少ない」という意味は中国語で自ら生じた意味の変化であることが分かった。

## 5. 日本文献における「点々」

### 5.1 日本漢詩における「点々」

近代以前の資料において、管見の限り、「点々」の使用例は少ない。中国語資料と同じく、「点々」は、全て韻文で出現している。

(14)は、庭にある「蒼苔」が多いことを表現している。「駁」は多くの色が混在しているという意味を持っているため、「点々」は「駁」を修飾する副詞であると考えられず、名詞「蒼苔」を修飾し、特性を表すものであると考えられる。

- (14) 閑庭點點蒼苔駁。暗牖依依緑柳低。 (『文華秀麗集』)

訓読：閑庭點々蒼苔駁かに、暗牖依依緑柳低し。

- (15) 金文玉字。字字吞百千之契經。空點有畫。點點含萬億之義理 (『性靈集』)

訓読：金文玉字、字字に百千の契經を呑み、空點有畫點點に萬億の義理を含む。

(14)のような、名詞を修飾する成分として働いている「点々」がある一方、(16)のような名詞として使用される例も見られる。

(15)は『性靈集』の一文であり、仏經には多くの道理が含んでいることを意味している。(15)における「点々」は、前の句の「字字」と対応し、「点」を反復して「複数の点」の意味で使用され、梵文のことを指している。これは、名詞の「点々」が日本漢詩に使用された例である。

- (16) 點點隨風流不定、亦追高樹入昭陽 (『江戸漢詩集』)

訓読：點點と風に随って流れて定らざれども、亦高樹を追ひ昭陽にも入る

- (17) 夜涼時被風吹墜、點點隨波下淺灘 (『江戸漢詩集』)

訓読：夜は涼しく時に風に吹墜せらるれば點點として波に随ひて淺灘を下る。

江戸時代の日本漢詩には、(16)(17)のような例も見られる。

(16)は、多くの蛍が風の中にあちこちに舞っている様子を表現している。(16)における「点々」は、「点をうったように、あちこちに散在するさま」という意味で、「随」を修飾している副詞であると考えられる。

(17)では(16)と同じく、「点々」は蛍が点々として波に随って浅灘を下る様子を表現しているため、副詞の意味も含んでいると考えられる。このように、この段階では、日本人が書いた漢詩では、「点々」の副詞的用法が使用されていると考えられる。

近世までの資料における「点々」について、意味用法が中国語の意味用法と大きな違いは見られない。これらは日本の文献における「点々」の例であるが、中国の漢詩を模倣、習得して用いた日本漢詩で見られる例であるため、中国語に強く影響を受けていると言える。

## 5.2 日本語に定着していく「点々」

近代になると、日本漢詩だけではなく、小説と雑誌にも「点々」の使用が見られるようになっていく。近代以前の「点々」は殆ど韻文にあるため、近代には、韻文の形に似ている用例も見られる。

- (18) 行く船歸る船點々星羅して眼も覺めんばかりの絶景にぞある。（「桑港繁昌記」，山岸覚太郎，『太陽』，1867）

(18)の「点々」は動詞の「星羅する」にかかわり、副詞的用法を持つ例と考えられる。助詞の提示がないため、「点々」がどのような形で日本語に使用されるのかがまだ曖昧である。

その後、明確に「たる」を伴って名詞を修飾する「点々」と「と」を伴って動詞を修飾する「点々」が見られる。例えば、次のような例が見られる。

- (19) 例せば日暖かに海平らかにして點々たる白帆の或は近く或は遠く烟波の中をゆくの光景は則ち美の品なり。（「和歌を論ず(二)」，森田思軒，『国民之友』，1861）

(19)は、「たる」を伴って、海に数多くの白帆が小さく多く、あちこちに散在している状態を表現している。近代には明らかに述語として使用される「点々」が見られないが、「露點々」のような「が／は」を省略した用例が存在している。(19)と(20)における「点々」は、恒常的な属性ではなく、一時的な様子と情態を描く「点々」であると考えられる。

- (20) 猛虎高く山月に叫ぶの時、露點々。(「猛者のなさけ」, 巖本善治, 『女学雑誌』, 1863)

それに対して、助詞を伴って、副詞として使用される用例が多く見られる。

- (21) 夕暮れに海上に点々と浮んだ小船を見渡すのは悲しいものだ(「東京から青森まで」, 『尋常小学国語読本巻九』, 1918)
- (22) 想像はその時限りなく咲き続く白い花を基石の様に点々と見た。(『明暗』, 夏目漱石)

これらの「点々」はいずれも、後続の助詞「と」ないし「として」を伴うことで、動詞を修飾できるようになっている。(21)(22)における「点々」は両方とも「点を打ったように、あちこちに散在しているさま」の意味で用いられる。「○○と」という明確な副詞の形を持っている例があるため、この時期では、日本語に「点々」が副詞として使用できることが確認される。

本節では、近代における「点々」の使用状況の変化を観察するために、近代の使用例と『BCCWJ』を比較して調査した。表3ともに、「名詞」には、「いくつかの点。また、俗に点線をいう」の意味で使用される例、「形容詞的」には、「点を打ったようにあちこちに散在している」の意味で使用され、且つ連体修飾用法、または叙述用法を持つ例、「副詞的」には、「点を打ったようにあちこちに散在している」の意味で使用され、且つ副詞的の用法をもつ例をカウントした。「形容詞的」には、「点々+名詞」や「名詞+点々」の例をカウントした。「副詞的」には、「と」の例(「点々として」も含んでいる)と、助詞を伴わない例(「φ」で示す)を別々にカウントした。

表3 近代資料における「点々」

分類		雑誌	教科書	明治の 文豪	大正の 文豪
名詞		0	0	0	0
形容詞的	名詞+点々	5	0	0	0
	点々+名詞	16	0	0	1
副詞的	ト	14	9	15	13
	φ	12	0	1	0

表3に示すように、近代の資料において、形容詞的用法をもつ「点々」と副詞的用法をもつ「点々」が両方存在しているが、形容詞的用法をもつ「点々」より副詞的用法を持つ例が多い。「点々+名詞」の形で使用される「点々」には、属性を表す「点々」がなく、全てが状態を表現するものである。一方、述語の位置に現れる「点々」が殆どない。日本語において状態を表す形容詞として使用される「点々」は、中国語と異なり、少ないと考えられる。それに対して、副詞的用法を持つ「点々」が多くなっている。日本語において、唐の時代に多く観察された「点々」の副詞的用法を受け継いだのではないかと考えられる。

副詞的用法をもつ「点々」について、助詞「と」を伴う用例が多いが、φ形式を取った用例も見られる。これは、近代前期には(18)のような韻文の形に近く、格助詞がない例があるからである。その後、「と」を付して「漢語+と」の形で連用修飾用法を持ち、「点々と」の形が定着していくと考えられる。

表4 BCCWJにおける「点々」

レジスター 分類	名詞	形容詞的		副詞的	
		名詞+点々	点々+名詞	ト	φ
出版・雑誌	0	0	0	8	0
出版・書籍	4	0	3	70	1
出版・新聞	0	0	0	2	0
図書館・書籍	5	0	1	106	3
ブログ	0	0	1	12	8
ベストセラー	0	0	0	14	0
韻文	0	0	0	4	1
教科書	2	0	1	4	0
広報誌	1	0	0	1	0
国会会議録	1	0	0	0	0
知恵袋	20	0	0	2	0

近代と現代の資料と比べ、①「いくつかの点」という意味で使用される用例が、特に知恵袋のレジスターで多くなっていること、②形容詞的用法をもつ「点々」が減少していること、③副詞的用法をもつ「点々」について、助詞を伴う用例が圧倒的に多いことがわかる。

②について、近代における「点々」の 86 例中、22 例が形容詞的用法をもつものに対して (26%)、『BCCWJ』では 3% (5 例) である。近代以降、「点々」の副詞的用法が中心になっていると考えられる。

③について、現代になると、小説だけではなく、雑誌や新聞にも、助詞を伴う用例が増加している。ここから、副詞的用法をもつ「点々」の使用形式として「点々と」の形が定められていると考えられる。

## 6. まとめ

以上、「点々」を調査対象として取り上げ、中国語と日本語資料における用例を整理・比較することにより、意味・用法などの変化を考察した。調査した結果、「点々」は、日中両言語で異なる方向で変化していることが分かる。

日本語に入る前の「点々」は、形容詞的用法と副詞的用法の二つの用法を持っている。その後、中国語において、状態を表す形容詞用法が盛んになるにつれて副詞的用法が衰退している。一方、日本語において、「点々」は、副詞として定着していく傾向が見られる。

「点々」のような、現代中国語において形容詞として働き、日本語において副詞的用法を持つ語はまだ多く存在するため、対象となる語を広げて体系的な把握に努めたい。

## 参考文献

- 荒正子(1989)「形容詞の意味的なタイプ」言語学研究会編『ことばの科学 3』pp.147-162, むぎ書房.
- 工藤真由美(2001)「述語の意味類型とアスペクト・テンス・ムード」『月刊言語』30-13, pp.40-47, 大修館書店.
- 工藤真由美(2002)「日本語の文の成分」飛田良文他編『現代日本語講座 第5巻文法』pp.101-119, 明治書院.
- 国立国語研究所編(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版.

張国憲(1995)「現代汉语的动态形容词」『中国语文』1995年第3期, pp.221-229, 中国社会科学院语言研究所.

張国憲(2006)『現代汉语形容词功能与认知研究』商务印书馆.

鳴海伸一(2014)「漢語形容動詞・副詞の品詞性と用法変化―通時的観点からみた近現代の特徴―」新野直哉編『近現代日本語における新語・新用法の研究』pp.56-75, 人間文化研究機構国立国語研究所.

鳴海伸一(2015)『日本語における漢語の変容の研究 副詞化を中心として』ひつじ書房.

日本大辞典刊行会(2000)『日本国語大辞典 第二版』小学館.

樋口文彦(1996)「形容詞の分類―状態形容詞と質形容詞―」言語学研究会編『ことばの科学 7』pp.39-60, むぎ書房.

前田富祺(1983a)「漢語副詞の種々相」渡辺実編『副用語の研究』pp.360-378, 明治書院.

前田富祺(1983b)「漢語副詞の変遷」『国語語彙史の研究』4, pp.189-231, 和泉書院.

八亀裕美(2008)『日本語形容詞の記述的研究―類型論的視点から―』明治書院.

八亀裕美(2001)「現代日本語の形容詞述語文」『阪大日本語研究別冊』1, pp.1-144, 大阪大学大学院文学研究科 日本語学講座.

李临定(1986)《現代汉语句型》商务印刷.

羅竹風(2011)『漢語大詞典』中国上海:上海辞書出版社.

Givón, T. 2001. *Syntax I: An Introduction*. John Benjamins Publishing.

## 言語資料

国立国語研究所(2020)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Ver. 2020.02)

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search> (2020年8月28日最終確認)

国立国語研究所(2020)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Ver. 2020.03)

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search> (2020年8月28日最終確認)

国文学研究資料館電子資料館『日本古典文学大系本文データベース』『新大系本文データベース』

『CD-ROM版新潮文庫 明治の文豪』

『CD-ROM版新潮文庫 大正の文豪』

『漢籍全文資料庫』

『国家語委古代語語料庫』(語料庫在線)

サイ カイク／人文社会科学研究科  
(2020年9月11日受理)